

言葉の使い分けに関する一考察

—— 事件が起きた！ 事件が起こった！ ——

富 阪 容 子

1. はじめに

ある雑誌で次のようなコラム¹⁾を目にしたことが本稿のきっかけである。

1. 最近、テレビを見ていて気になるのは、ニュースを読む人が使う「事件が**起きた**」という言い回しである。「事件が**起きた**のは昨夜の十時ごろで…」といわれても何も感じない人の方が多いと思うが、事件は「**起きる**」のではなく「**起こる**」のだと教わってきた者は頭の中で「事件が**起こった**のは昨夜の十時ごろで…」と翻訳しながら聞いている。「**起きる**」は横になっていたものが縦になること、「**起こる**」は何もなかったところに新しい事態が発生すること。そう思っているので、「事件が**起きる**」といわれると、それまで寝ていた事件があわてて起きているところを想像するのだ。

一方、「今日の気になる言葉 1, 2, 3」²⁾の中にも次のようなコメントがある。こちらは「**起きる**」ではなく、「先ほど」という日本語表現が気になると思われる。

2. 「先ほど**起き**ました人身事故で。」今朝7時半過ぎに起きたJR横浜線の人身事故でアナウンスは繰り返さう述べた。月曜日の朝、止まった電車に30分以上も押し込められた乗客にとってそれは“先ほど”ではない。運転再開までの時間を短く印象づけたい意識は明らか。明確に**起きた**時刻で言うべきだ。

以上で明らかになっているのは、事件や事故に関するテレビ報道の中で「**起きた**」という言葉が多用されているという事実である。次に、「事件（事故）が**起きた**」という表現には違和感を抱く聞き手とそうでない者がいて、言葉のゆれ現象が観察されるということである。そこで、日本語教育の現場ではどちらの語彙を学習者に教えるべきだろうかという疑問が生じてくる。両方の語彙を提示するとすれば、その使い分けの基準を明らかにすることが求められるだろう。この両動詞の持つ意味概念、並びにその使用場面や書き手（話し手）の心理分析を進める必要があると思われる。そのために、まずは各種辞書にあたってみて、語義がどのように記述されているかを観察することから始めたいと思う。その後、新聞を初めテレビ報道やドキュメンタリー等で使用される実際例を調査して、どのように使いかたの区別がなされているかの実態を明らかにしたいと思う。第二言語習得者にとっての語彙習得研究は注目を集めている分野であるが、日本語教育分野で実践的研究を進めていくことはまだまだ今後の課題とされている。そのための一歩としての位置づけから、基本的な語彙の一種と見なしうる「**起きる**」と「**起こる**」の使い分けの基準について考察したい。

2. 辞書の定義

前節で述べたような疑問に対する答えを求めるにあたって、辞書はどれだけの情報を提供してくれるだろうか。「起きる」と「起こる」との意味内容の違いを調べる際に関心があるのは類義語としての共通項ではなく、両者の意味の相違や使い分けの基準である。辞書の定義でしばしば問題になるのは、Aの語の意味を調べると、「Bと同じ」とあり、Bの意味を調べると、「Aと同じ」と記述されているという悪循環である。AとBが同義語であるはずがないのに、どうしてこのような説明を提供してすませようとするのだろうか。これでは、日本語学習者が求める情報を提供したことにはならない。日本語学習者はAの語の意味もBの語の意味も知らない。「大辞林第二版三省堂」「新和英中辞典第4版研究社」等³⁾を見ると、「起こる」と「起きる」の意味特徴は以下のようにまとめることができるだろう。

起こる

- | | |
|-------------------|--------------------|
| ① 物事・事態や動きが新しく生じる | 例： 事件が起こる。 |
| ② ある感情や欲望が心の中に生ずる | 例： 意欲が起こる。 |
| ③ 起因する | 例： 誤解から紛争が起こった。 |
| ④ 病気の症状が出てくる | 例： ヒステリーの発作が起こった。 |
| ⑤ 勢いがさかんになる（興る） | 例： この儀式は平安時代に起こった。 |

起きる

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| ① 横になっていたものや傾いていたものが立つ。 | 例： 七転び八起き。 |
| ② 目を覚まして寢床から出る。 | 例： 毎朝6時に起きて朝食をとる。 |
| ③ 目を覚ます | 例： 目覚まし時計で起きる。 |
| ④ 眠らないでいる。 | 例： 毎晩12時までには起きています。 |
| ⑤ 事件などが生じる。 | 例： 事件が起きる。 |

ここで注目すべきことは、「事件が起こる」は①として記述されているのに対して、「事件が起きる」は⑤として挙げられているということである。「起きる」の本義からの転用により「事件が起きる」という表現が生まれたという過程が想定される。「起こる」①～④は「起きる」で書き換えることが可能であるが、「起こる」⑤の用法（興る）は「起きる」で書き換えることが不可能である。図解すると次のようになる。

	起こる ①②③④	起こる ⑤
起きる ①②③④	起きる ⑤	

「起きる」の場合、①は別として②③④はヒトが主体となるのに対して、⑤は無生物が主体となって、ヒトの意志にかかわらず発生する状態を示すのに用いられる。この点において、すべて無生物が主体となる「起こる」とは異なっている。

次に、「起きる」と「起こる」の使い分けに関して、「類義語使い分け辞典」及び「NHK

放送文化研究所によるQ&A⁴⁾の説明を参照してみる。「事故が起きる」と「事故が起こる」の使い分けに関して、前者には次のような記述が見られる。

3. 「起きる」は予測できる事故, 「起こる」は予測できない不慮の事故という前提がある。(中略)「起きる」を使うと, 予測できていただけに, 「大変だ!!」といった驚く, びっくりするという気持ちが消えてしまい, 起きたことを過小評価するニュアンスがこめられる。

ここで述べられている解釈が妥当なものであるかどうかに関する検討は次節以下で行なうことにする。一方, 後者は次のような回答を示している。

4. Q: 「津波が起きる」と「津波が起こる」とでは, どちらが正しいのでしょうか。

A: 「津波が起こる」というのが伝統的な言い方で, 「津波が起きる」はどちらかというと新しい表現です。「津波」や「地震」の場合, 現代ではどちらを使っても構いません。また, ニュアンスの違いもほとんどありません。(中略)ただし, いまでも「起こる」しか使えない場合もあります。たとえば, 「サッカーブームが巻き起こる」や「拍手がわき起こる」などは「巻き起きる」「わき起きる」とは言えません。

この回答は辞書よりはるかに多くの有用な情報を提供しているが, 次のような疑問が生じる。

- ① 「津波が起きる」という表現はどの程度に新しい表現なのか。
- ② 「津波」や「地震」の場合, どちらを使ってもよいとあるが, それ以外の場合はどうなるのか。
- ③ 「ブームが巻き起きる」「拍手がわき起きる」とは言えないが, 「ブームが起きる」「拍手が起きる」という表現はありえる。

以上のような疑問を解決するために, 各種新聞, テレビ放送, 文学やドキュメンタリー等の資料をもとにして可能な限り多くの使用例にあたってその実態を観察してみたい。

3. 実際の使用例の調査

下記の資料⁵⁾をもとにして実際の使用例とその用法について観察する。

- A 新聞 (日経テレコン, 朝日新聞, 読売新聞, 戦前の各種新聞)
 B テレビ放送 (NHK, 日本テレビ, テレビ朝日, フジテレビ)
 C 文学作品 (青空文庫)

「起きる」あるいは「起こる」が用いられる場面としては次のようなものが挙げられる。

- ① ニュース報道 (事故, 事件, 災害など)
- ② ニュース解説 (原因解明, 防災など)
- ③ 医療や健康に関する情報提供

ニュース解説者筑紫哲也が「世の中で起きている出来事」に対する意見を述べる番組「ニ

ユース23」の「多事争論」の中では「起きる」が頻繁に使用されるが、「起こる」はほとんど使用されない。

5. こういうことは100年200年も起きないことが起きているんだとか、そういう説明は十分にあるわけでありませう。そして地球にはこういう天変地異が起きるんだということも、これまでの記録が証明しております。しかし問題は（中略）自然の現象として起きているのか、あるいは人間がやらかしていることが地球に何らかの影響を与えるのか、与えてこういう事が起きているのか、というこの点であります。2004 0720 上記の文では「起きる」を「起こる」で代用してもほとんど意味の違いが生じない。この話し手はもっぱら「起きる」を用いることに統一しているようだが、一般の報道では「起きる」及び「起こる」が同じ文脈の中に混在して用いられている現象がしばしば観察される。両者の違いがほとんど意識に上ることなく使われているからであろう。

6. 園児殺害事件が起きた七月一日から一週間、県内すべての小中学校を親や地域住民に開放し、児童と一緒に情緒教育に取り組む事業を計画。事件が起きたのはその準備のさなかだった。（中略）こうしたショッキングな事件が起こると周囲の大人が動揺したまま、すぐに小学校や子ども全体に規制をかけようとしがちだ。しかし、そうした拙速な動きはむしろ子どもの自由を奪うだけで、「何が起こったのか」という冷静な分析なしには問題を解決することにならない。 2004 0602 日本経済新聞

7. 熱性けいれんって何ですか。

発熱に伴って、けいれんや意識障害を起こすものです。熱の上がりかけに起こるのがほとんどで、上がりきってしまうとかえって起こりにくくなります。遺伝的な要素が強く、両親や兄弟が起こしたことがある場合は要注意です。（中略）

何歳まで起きるの？

6歳まで起きるとされています。6歳を過ぎて起こす場合はてんかんを考えましょう。

2002 12 フジテレビ からの火曜日

例6の場合は前半では「起きる」が用いられていたのに、後半は「起こる」に変更されている。この例でもわかるように、共有している意義素が明らかのために日本語の書き手（話し手）はさほど明確な理由なしに両者を使っている。例7の場合は「起こる」「起きる」「起こす」の3種の動詞が用いられている。「起きる」「起こる」という2種の自動詞に対して、他動詞は「起こす」のみが用いられる。

	自動詞	他動詞
1	起こる	起こす
2	起きる	〃

「起きた!」「起こった!」では意味不明であり、何が発生したかを伝えるためのガ格の成分が必須である。何が起きるか、何が起こるかについて実際例にあたったところ、次のよ

うな結果が得られた。ここで述べる異変とは劇的な異常事態ばかりではなく、単なる状態変化も含んでいる。ある正常な状態から逸脱した状況の発生を示す。正常値から逸脱している程度はさまざまである。「天変地異」「戦乱」のように程度の激しい異変からはじまって「日食」「潮の満ち引き」のような自然現象や「誤解」「疑問」「意欲」「発作」のように、心や体に起きる変化までを指す。次のような語が共起する。

A 自然界に起きる変化

- ① 天災 (津波 地震 災害 落雷 自然発火)
- ② 自然現象 (日食 月食 放電 潮の満ち引き 静電気)

B 人間界に起きる変化

- ① 人災 (事件 事故 戦争 革命 火災 テロ 衝突 爆発)
- ② トラブル (故障 障害 波乱 渋滞 摩擦 矛盾 混乱)
- ③ 身体的変化 (けいれん 発作 変調 脳梗塞 熱中症)
- ④ 心理的变化 (やる気 意欲 出来心 ひらめき 疑問)

A①②及びB①②は「(場所)で変化が起きる／起こる」という形式をとるが、B③④は「ヒトに身体的、心理的变化が起きる／起こる」という形式をとる。以上の例から明らかのように、「起きる」「起こる」の主体は望ましくないものが大半を占めるが、どちらとも言えない自然現象もあり、わずかながら望ましい状態の発生を示す場合もある。「拍手と歓声が起こった」「ひらめきが起こった」「奇跡が起こった」などは望ましい変化と見なされよう⁶⁾。

マイナ評価	中立	プラス評価
-------	----	-------

次に、「事件が起きる」「事件が起こる」のどちらがより多く用いられているかを観察してみる。以下は日経テレコン21を検索して得られた件数である。全期間とは1975年から2004年8月を指す。3年間、1年間は各々2004年8月からさかのぼった3年間、1年間を指す。

	全期間	3年間	1年間
事件が起きる	1845件	306件	113件
事件が起こる	1422件	192件	63件

この結果を見ると、「事件が起きる」「事件が起こる」は共に使用頻度が高いが、どちらかといえば「事件が起きる」の方が優勢で、しかも近年その傾向が強まりつつあることがわかる。1975年から現在に至る約20年間で見ると、「起きる」の使用例が「起こる」の1.3倍であるが、過去3年なら1.59倍であり、更に過去一年に限定すると1.79倍になる。右肩上がりに「起きる」が増加しているのはB②のような「トラブルの発生」を示す場面が現代社会で多様化していることと関連があると見られる。

第二節で紹介したQ&Aによると、「起きる」はどちらかという新しい表現であるとされている。時代をさかのぼって、古語辞典⁷⁾にあたってみると、「起きる」の古い形式「起

く」には、「新しい事態の発生」を示す用法は見られないのに対して、「起こる」には「新たに始まる」の意味を示す例がある。次に、戦前の新聞にあたってみることにしよう。神戸大学電子図書館システムによって「明治末～戦前期の新聞記事データベース」（10万記事の画像と全文テキスト）を検索してみると、「起きる」はそれほど多くないものの、次のように使用例が見受けられる。

8. 見込み通り十四円で買えば結構だが、もし購入価格が二十円以上であるならば石炭代だけで年額約三千万円の狂いが起きる。

9. 大東亜戦争起きるにおよんで現地支那は著しく変貌を変えた。

「問題が起きる」「革命が起きる」「疑問が起きる」「矛盾と摩擦が起きる」「ゴタゴタ騒ぎが起きる」「二、二六が起きる」「損害が起きる」「故障が起きる」等、現代と同様の使用例が数多く見受けられる。しかし、「起こる」が120件あるのに対して、「起きる」の使用例は約半数の58件に過ぎない。

次に青空文庫⁸⁾を検索してみると、佐々木味津三（1896-1934）「右門捕物帖」の中には「起きる」の使用例が多いことがわかる。しかし、「起きる」が137件であるのに対して、「起こる」は160件であり、やはり「起こる」の方が優勢である。「起こる」を基準値1とすると、「起きる」がどれだけの割合で増えているかを次に示す。

戦前	1975-2004年	2001-2004年	2003-2004年
0.5	1.3	1.59	1.79

時代の変遷に伴うこのような語彙の変化は何に原因があるのだろうか。「起きる」の方が「起こる」より口語的表現として、そちらへと推移していく傾向が強まっているように思われる。以上の調査は新聞に基づくものであるが、話し言葉を調査対象にすればいっそう顕著な変化の実態が観察されるのではないだろうか。

4. 使い分けに関する考察

「何があった？」と問われると、「事件があった！」「事件が起きた！」「事件が起こった！」「事件が発生した！」等の応じ方が考えられる。どれが適切かは場面情報なしに決められないが、「事件があった」が最も口語的で、「事件が発生した」というのは限られた状況下でしか使われない表現である。

10. a. 何か困ったことがあったら いつでも相談してください。
- b. 何か困ったことが起きたら いつでも相談してください。
- c. 何か困ったことが起こったら いつでも相談してください。
- d. 何か困ったことが発生したら いつでも相談してください。

このような話し言葉の場合は10aが一番自然であり、10dには違和感があるだろう。日中

辞典⁹⁾をひいてみると、「起こる＝発生する」とある。事件、事故、トラブルが主体となる場合は、「～が発生する」と言い換えることが可能であるが、「地震が発生した」とは言えないし、「けいれんが発生した」とも言えない。逆に、「有毒ガスが発生する」「台風が発生した」とは言えるが、「有毒ガスが起きる」「台風が起きる」と表現することはできない。「有毒ガスが生じる」は可能だが、「台風が生じる」は問題がある。次の表からもわかるように「起きる」「起こる」は類義語と見なすことができるが、「発生する」という漢語と、「ある」「起きる」「起こる」「生じる」などの和語の使い分けはより困難なものであろう。

	事件が	地震が	けいれんが	台風が	有毒ガスが
あった	○	○	△	×	×
起きた	○	○	○	×	×
起こった	○	○	○	×	×
発生した	○	×	×	○	○

次に、「起こる」と「起きる」の使い分けに焦点を当てて考えてみたい。「起きる」はヒトやモノが水平になっていた状態が垂直状態へと変化することを本来の中心的語義としていたのだが、そこからの転用として「新しい事態の発生」という意味役割も担うようになったことについては前にも述べた。それに対して、「起こる」は新しい事態の生起を示すのがそもそもの本義であったとみなされる。第一節で述べたように、書き手（話し手）によって語感に差があることは確かだが、「起こる」が使われる文脈では、ごくわずかな例外を除いて「起きる」との置き換えが可能となってきているのではないだろうか。例外とは次のような形態上の制約から生じるケースに限られる。

事件の**起こり**はこうだった → × 事件の**起き**はこうだった。

歓声がわき**起こった** → × 歓声がわき**起きた**

逆に、「起きる」が使われる文脈で「起こる」による書き換えが可能かどうかを観察してみると、やや抵抗があるケースが見られる。社会の変化に伴い、コンピューター用語などの現代用語が増えている現在では、操作上で生じる不具合について述べる際に「起きる」が用いられる機会が増えてきている。「起きる」は「起こる」よりも共起する語に関して制限が少なく、次のような語彙とも結合しやすい。

(文字化け, エラー, システム障害, フリーズ, シフト, 医療ミス, チャイナクロス, パニック, シフト, ブーム, ミスマッチ, プーイング, アレルギー反応, 手違い, 値崩れ)
これらは繰り返して起こる可能性のある現象である。天災や事件、事故（同じ事件、事故は繰り返さない）のように一回きりの現象と異なる。前者では「起きる」が選択されることが多く、後者では「起きる」「起こる」が共に用いられる。また、「起きる」の方が「起こる」よりも話し言葉的な場面で用いられることが多い。「起こる」は現象から一步距離を置いて客観的に事実を描写したり論説を加えたりするのに適している。次の文では「起きる」が使えないわけではないが、「起こる」を用いることによって生じる効果が期待されている。

11. この問題がなぜ**起こった**のか解明し2度と**起こらない**よう農水省を改革することだ。
12. 先生は「第二次世界大戦は1939年に**起こった**」と言った。

例12のように歴史的事実を客観的に描写するには「起こる」が適当だと見られる。「僕が生まれた翌年に第二次世界大戦が起こった」というような個人と関連づけた記述なら、「起きる」との書き換えは自由になされるだろう。以上からわかるように、二つの動詞には基本的な意味の違い、使われる文体や場面の違いはほとんどなく、周知的、付随的な微妙な語感の違いが見られるだけである。上記12のように、ある出来事と話し手（書き手）との心理的距離の認識度によって、古くから用いられていた形式「起こる」が選択される場合がある。「事件が起きる」「事件が起こる」という用法に限って言えば、きわめて類似性が高いと言うことができるだろう。したがって、第2節の3に転記したような辞書記述——「起きる」は予想されたことの発生を示し、「起こる」は予想外の事態の発生を示す——という意味解釈は現代ではすぐわなくなっているものと思われる。

5. 他動詞はどんな条件下で用いられるか

「起こす」という動詞の英訳として“cause something to happen”¹⁰⁾とあるが、これでは他動詞を使うための情報を提供したことにはならない。「起きる（起こる）」という自動詞と「起こす」という他動詞の使い分けに関しては、語彙体系の問題であると同時に、文法体系の問題でもある。第3節で述べた「起きる」「起こる」と共起する語彙について再度振り返ってみよう。そこでは、「人災」「天災」「自然現象」「トラブル」「病症」などが挙げられている。これらの要素が「起こす」という他動詞と共起するかどうかについて考えてみる。「天災」や「自然現象」等、人間の手が及ばないものに関しては限られた例しかない。下記13のように人間以外のものが主格になれば使用される可能性がある。下記14は「津波を起こします」と書き換えることが可能であろう。

13. 地震を**起こす**メカニズムを研究している。

14. 日本列島の周りには、プレートが重なり合う境界（プレート境界）が長く連なっており、プレートがずれる時に海底で巨大な地震が発生し、津波が発生します。

一方、「人災」「トラブル」「発症」に関してはごく自然に他動詞の形式が選択される。

15. 三菱自動車製大型トラックが、車両火災を**起こ**していたことが17日、分かった。

16. 長嶋茂雄監督（68）が脳こうそくを**起こ**して三ヶ月が経過した。

ほかにも「戦争を起こす」「故障を起こす」「熱中症を起こす」「やる気を起こす」のように使われる。次の例のように事故に対する責任を感じて謝罪する場合には、「起こす」が適当とされる。隣人に借りた器物を破損した場合、「こわれてしまいました」ではなく「こわしてしまいました」という謝罪が適切であることと同様である。これら他動詞は主体の意図的行為を示すのではないが、自己責任を認めていることを示す。自動詞は無意識的行為を示す

のが一般的だが、他動詞が意図的行為を示すか否かは語彙の持つ性質や文脈によって異なる。下記17は意図的行為だと考えられるが、18cや19cは意図的行為ではない。

17. 学校などへ不審者が侵入して**起こす**事件が相次いでいる。

18. × a. 事故が**起きて**すみません。

× b. 事故が**起こって**すみません。

c. 事故を**起こして**すみません。

「病気が起きる」「病気が起こる」とは言わないが、病気のために各症状（身体的変化）が生じた場合には「起きる」「起こる」「起こす」の三種の動詞のいずれかが用いられる。「けいれんが起きる（起こる）」と「けいれんを起こす」の選択基準はどこにあるだろうか。

19. a. けいれんが**起きて**病院に運ばれた。

b. けいれんが**起こって**病院に運ばれた。

c. けいれんを**起こして**病院に運ばれた。

19の場合は、いずれも不適切だとは言えないが、最も自然なのは19cではないだろうか。しかし、18cは事故を引き起こしたことへの引責の表現だが、19cの場合は「けいれんを起こした」という表現は「けいれんが起きた（起こった）」と大差がない。「けいれんを起こした」というのは主体の意図的行為であることを示さない。「ヒトがけいれんを起こした」+「ヒトが病院に運ばれた」という表現が最も自然な文形式となる。他動詞を用いると、その事態によって面倒な状況が引き起こされたというニュアンスを含むことになる。「起きる」「起こる」と共起する要素の大半が望ましくない事態であることがその原因である。こう考えると、17cと18cの共通要素が見える。本来は「起こる」と「起こす」が対応する自他動詞だったのではないかと思うが、近年になって「起きる」が多用されるようになったため、現在では「起きる」「起こる」という二つの自動詞に対して、一つ他動詞「起こす」が存在する状態¹¹⁾になっている。このように「起きる」「起こる」の双方が共存する状態は今後も継続するものと思われる。

6. 語彙の習得

日本語コースのシラバスを考える際に、初級から上級に至る各段階で求められる目標はそれぞれ異なっており、対象とする学生によって調整することも必要になってくるが、各コースの目標の違いを具体的に示すものは学習漢字数と学習語彙数である。そこで、日本語能力試験¹²⁾の基準を参考にしよう。ここで要求されている漢字や語彙を習得した者は各級の能力試験に合格する可能性が高いということになっている。

級	漢字	語彙	学習時間の基準
1級	2,000字	10,000語	900時間
2級	1,000字	6,000語	600時間
3級	300字	1,500語	300時間
4級	100字	800語	150時間

この基準表でしばしば問題となることは2級と3級のギャップが大きいことである。初級の学習段階で限定された語彙しか習得していない学習者はこのような目標に向かってどのような方法で学習を進めていけばよいのだろうか。実際の指導がじゅうぶんなされないままに、漢字や語彙の学習成果を調べるための小テストを繰り返しているに過ぎないという批判の声もある。初級日本語では基本文型に対する集中的学習を要求されることが多いために、語彙に関してはできるだけ限定されたものを使用することになっている。しかしながら、初級レベルを終了した後に初中級から中級レベルに進む段階になると、自分の周辺の身近な話題に関する言語表現にとどまらず、もっと社会的な問題に対する描写や意見の叙述等の言語表現が求められるようになる。初級段階を終えた学習者が中級へと進む段階においてこそ、語彙指導の充実が求められるのではないだろうか。その段階で必要とされるのは「事件が起きる」「事件が起こる」のような使用頻度の高い語彙の習得である。

日本語能力試験の2級の段階に達すると、それ以降の語彙学習は学習者主体で進められることが求められている。1級で必要とされる10,000語の中には使用語彙ばかりでなく理解語彙を多く含んでいる。新聞で用いられる語彙は母語話者にとっても理解語彙にとどまっているものが多い。新聞や小説の多読、ニュースの視聴などを日常的に行うことが語彙習得のための必要条件である。それだけの漢字数、語彙数を習得するためには学習者本人の継続的な努力が求められるのは当然である。多読によって付随的に語彙習得が進むという研究¹³⁾が見られるが、その段階の学習者には語彙の意味類推の方略も身に付いてくるであろう。

このような語彙指導に関して日本語教材の中でどのような配慮がなされているのか、次の2種の教科書を対象にして観察してみる。

A “Japanese Communication, Culture, Context” 「なかま」の場合

この教科書は主としてアメリカの大学で学ぶ初級学習者を対象として作られている。この教科書は新出語を理解語彙と使用語彙¹⁴⁾とに分類して提示している点が特徴である。阪神大震災のような災害や各国の犯罪率比較などに関する英文解説があり、個人の身近な話題から社会問題へと目を向けさせており、教科書の最終課では「環境と社会」に関するテーマを扱っている。この課では「起きる」「起こる」と他動詞の「起こす」が初出するが、それぞれの動詞の違いは明らかになっていない。

- ① 地震はいつ**起こる**か分からないので _____。(文完成問題)
- ② 災害が**起きた**時、どんな所に**げたら**いいと思いますか。
- ③ 温暖化を**起こす**ものは色々あるが、そのうち64%は二酸化炭素である。

B “Intensive Course In Japanese (Intermediate)” の場合

中級レベルの日本語学習者のための教科書である当書の中でも、「起こる」「起きる」が混在して用いられている。

- ① 大地震が**起こる**などというデマが飛ぶと气象台にジャンジャン問い合わせの電話がくる。
- ② 地震が**起きた**時にまず初めにしなければならないのが台所やストーブの火を消すことです。

何の配慮もなく「起こる」と「起きる」を用いているのは、文意の解釈や理解に重点があって、使用語彙として活用することが視野に入っていないからであろう。考えてみれば、筆者自身、中級レベルの教科書の中で「地震が起きる」と「地震が起こる」が混在して使われていることに気づいていながら学習者から問われないままに放置してきたという記憶がある。語彙教育が軽視されている日本語教育の現状をもっと反省するべきであろう。日本語学習者が「起きる」「起こる」「起こす」のような基本動詞を習得するには、これらの類義語が持つそれぞれの特性を知ることが欠かせない。共有している意義素が多いものの、各動詞が持つ個性は異なっている。このように、類義語の使い分けの実態を把握し、語彙に関する明示的知識を得ることによって日本語学習者にとっての語彙習得が成功に導かれるものと期待する。日本語学習者にとって欠かせない辞書がいつそう充実したものとなるように各語彙の意義素の記述及び語彙特性に関する必要不可欠な情報の提供を望むものである。

7. おわりに

まったく同一の意味を持ち、同一の機能を持つ同義語は存在しないという前提のもとに、本稿では二つの動詞の違いを求めてきた。しかしながら、「事故が起きた」「事故が起こった」という表現について見る限り、その違いがほとんどないことが明らかになった。どちらを選ぶ傾向があるかに関しては人によって違いがあるが、どちらを選んでも許容されるのではないだろうか。「起こる」よりは「起きる」が選択される割合が増えてきているのが現状である。「起きる」「起こる」という二つの形式が併存する状況は「ことばのゆれ」の一種とすることができるだろう。「ゆれ」の中にはかなり長い間両者が並存する場合と、どちらかに多数が傾くものがあるという。ことばのゆれと言う場合には、「食べられる」が「食べれる」に取り替えられる現象（ら抜き言葉）が連想される。可能形の「行かれる」から「行ける」への変化、及び、使役受身の短縮形に見られるように、より短くて経済的な形式へと移行していくのが一般的な傾向である。「起こる」から「起きる」への推移の傾向もその現象の一部だと言える。「起こって」より「起きて」の方が簡略で、「起こらない」より「起きない」の方が音節が短い。「ことばのゆれ」とは必ずしも否定的なニュアンスを伴うものばかりではなく、むしろ言語生活の豊かさを示す現象と見なすことも可能である。NHK放送文

化研究所によると¹⁵⁾類義語のうちのどちらかを標準の表現と制定してしまうよりは、両者の並存を認めることによって自由な言葉の発達を見守る姿勢をとることを心がけているという。国語審議会は「言葉の変化を客観的にとらえ、変化の過程である語についてあらたに生じた別語形が従来の語形と併存する状態については、これを基本的には言葉の「ゆれ」としてとらえた上で、現時点でのより適正な言葉遣いを考えていきたい」と主張している。

新しい事態の生起を示すために「起きる」が多用されることによって、これらの動詞と共に起する語も豊かな拡がりを見せている。社会変化によって生まれた新しい語彙との結合も見られるようになった。現代言語生活の実態調査を進めることによって第二言語習得者のための語彙習得研究がいっそう充実していくことを望んでいる。本稿では主として書き言葉を調査対象としたが、話し言葉における使用実態の調査を進めることは今後の課題としたい。

注

- 1) 宮脇 孝雄 (2004)「今月のマスターピース」145号 マガジナルク
- 2)「今月の気になる言葉1.2.3」No.1046 2004 03 22
- 3)「起こる」の第一の意味として「新事態の発生」が挙げられているのに対して、「起きる」の解釈としては四番目から五番目に「新事態の発生」の意味が挙げられる。このことは多数の辞書でも共通している。「明鏡国語辞典」では「起きる」は物事(特に非日常的な事態)が新たに発生する、生じると定義づけており、本来は「事件を起こす」に対して「事件が起こる」のように言ったが、近年「起きる」が「起こる」に取って代わる勢いを見せているとしている。筆者の調査結果もこの説明を裏付けている。
- 4) 田忠魁ほか編著 (1998)「類義語使い分け辞典」研究社出版
NHK放送文化研究所「ことばQ&A」2004 04 08
- 5) 日経テレコン21とは、リアルタイムなニュース報道記事をはじめ、過去30年分を蓄積した新聞記事データベースである。
- 6) 再興, 振興, 興亡, 復興などからも類推できるように、「興る」は、状態が盛んになるという好ましい変化を示すのに用いる。
- 7) 金田一春彦監修 1999「完訳用例古語辞典」学習研究社
- 8) 青空文庫は著者の死後50年を経て著作権の切れた作品を主たる対象とした電子化テキストであるが、これで検索すると、事件性を持つ小説には「起きる」の使用例が多数見られる。
- 9) デイリーコンサイス日中辞典(三省堂)など
- 10)「起こす」の英訳として、「cause something to happen」と挙げられることがあるが、それでは「けいれんが起きる」と「けいれんを起こす」の区別を説明できない。「起こす」には「事故を起こす」「けいれんを起こす」等の用法以外にも、「行動を起こす」「訴訟を起こす」などの異なった用法もある。
- 11)「会社を起こす」は「起こる」の他動詞形であるが、「体を起こす」は「起きる」の他動詞形である。
- 12) 日本語能力試験は日本語を母語としない人を対象として日本語能力を測定し認定することを目的とするものである。学習漢字や語彙数が級別能力基準として定められている。
- 13) James Coady & Thomas Huckin (1997) "Second Language Vocabulary Acquisition" Cambridge University Press
- 14) Passive vocabulary, Active vocabularyの二分法がなされる場合と、Active vocabularyを更にControlled Active vocabularyとFree Active vocabularyに分けられる場合がある。
- 15) NHK放送文化研究所「ことばウラ・オモテNo.31 (2001) ことばは揺れているか」に次のようにある。

放送で使うことばを一つにしてしまうのは「ことばは自由でありたい」ということから見ると、具合が悪いことでもあります。

参考文献

- 北原 保雄編著 (2002) 「明鏡国語辞典」
- 柴田武ほか編著 (2002) 「類語大辞典」講談社
- 菅野 雅雄監修 (1994) 「類語表現活用辞典」創拓社
- 松田 文子 (2000) 「日本語学習者による語彙習得 — 差異化・一般化・典型化の観点から —」世界の日本語教育10号
- 森田 良行 (1991) 「語彙とその意味」NAFL選書 アルク
- 山口翼ほか編著 (2003) 「日本語大シソーラス」大修館書店
- 1973 「日本語と日本語教育 — 語彙編 —」文化庁
- 1981 「語彙 (教師用日本語教育ハンドブック)」国際交流基金
- 1985 「語彙の研究と教育 (下)」独立行政法人国立国語研究所
- 2002 「言葉に関する問答集 — 言葉の使い分け」独立行政法人国立国語研究所
- 2002 「豊かな言語生活のために」独立行政法人国立国語研究所
- 2003 「第二言語習得・教育の研究最前線」2003年版 凡人社
- 2004 「ことばを分類する」日本語学 Vol.23 明治書院
- Japanese Language Promotion Center (1980) “Intensive Course in Japanese — Intermediate”
- Makino, Hatasa (1998) “Japanese Communication, Culture, Context” 「なかま」Houghton Mifflin Company